



第二回 看護師さんに感謝をこめて

生誕二〇〇年「ナイチンゲール」物語

講談師 一龍斎貞花

ナイチンゲールの誕生日五月十二日を記念して1990年看護の日を制定。ナイチンゲール賞が1912年制定され、日本人は1920年、萩原タケ、山本ヤヲ、湯浅うめの3名が初受賞し、2020年現在世界の受賞者1517名の内、日本人は110人という世界でもフランスと共にトップ争い。

日本の看護師がこんなに多く受賞しているのは、GHQ総司令部看護課の医師サムス准将が、日本の看護師の仕事ぶりを見てびっくり。医師の介助、お茶くみなどのサービス、掃除など、

「これは絶対改善しなければいけない」と、ナースの講習を開始し、正しい看護、ケアの基準、病院の清掃など、専門職ナースとして自覚させ、1946年GHQ公衆衛生局による看護教育が開始され、アメリカでは、医師とナースは同等の資

格を持ち、医師から分離して独立性のある職業。日本は医師の指導のもとに働いているが、これではいけないと、ナースの地位向上が図られた。しかしその後医師会の力で医師の指導のもとで行うこと、給料も戦後一時医師と看護師は10対8くらいであったものが、現在は10対6ないし5ぐらいに差が広がっている。

沖縄の米軍ナース全員が将校で、大男の看護兵をアゴでこき使っているのを見て驚き、これが沖縄の男尊女卑の悪習に風穴を開けたといわれるほど。

働く女性のための慈善病院の院長に就任したフローレンス・ナイチンゲールは、

「病院は、第一番に清潔でなければいけません。看護婦は機械的に働くだけでなく、患者さんの気持ちを察して、できるだけ優しく接してあげて下さい」

フローレンスの優しい心遣いに、病人の気持ちは明るくなり、病院の中は日に日に和やかな、暖かい空気に包まれるようになっていきました。

クリミヤ戦争

1853年ロシアがトルコに戦いを挑み、戦いの火ぶたが切って落とされた。翌年の三月、イギリスはフランスと共にトルコへ援軍を送り込んだ。

世界一の海軍力を誇るイギリス。勝つに決まっていると信じられていたが、戦いは激しさを増し、トルコの北側クリミヤ半島で激突。

英、仏連合軍大勝利という政府の発表に大喜びしたものの、ロンドンタイムズの記事を見て国民が驚いた。

「戦場は激しい雨に見舞われ、その中兵士は激しく戦い、濡れた服の代わりもなく、前線は食べる物も少なく、負傷した兵は、薬や包帯がないどころか、手当てもされないまま死ぬのを待っている状態である」

従軍記者からのニュースを読んだ人々は信じられません。

第二次世界大戦の時の日本の大本営発表と同じで政府は事実を伝えていなかった。更に、

「医者が足りないのは仕方がないが、包帯やガーゼが無いのはどうしたことが、町の人が見かねてシーツや古着を持ってきてくれたほど。軍隊がここへ来て半年にもなるのに病院が出来ていない。軽い怪我で助かるはずの者が放っておかれたために、どれだけ多くの人が亡くなったことか。フランス軍は修道尼がきて看護



に務めている。イギリスの女性たちには、国を救う勇気がないのだろうか」

なんで黙っていられましょう。すぐにシドニー大臣に、

「是非クリミヤに行かせて下さい」と手紙を。入れ違いにシドニーからも、「トルコにあるイギリスの病院で働く看護婦を集めて行つて下さい。この仕事の出来る人は、貴女より他にいません。是非お願いします」

「お父様、お母様、この通り大臣からお手紙が参りました。イギリス女性として是非クリミヤに行かせて下さい」

「是非行つてあげなさい。イギリス女性の立派さを示していращい。このお金で必要な物を揃えなさい」

たくさんのお金を持たせてくれました。

新聞を読んでいきたいという人も多くいましたが、看護のことを知らない人を連れて行く余裕はありません。

あちこちの病院から38人の看護婦を選びました。

「今度トルコへ行くナイチンゲール嬢は、学問も出来、立派な家の娘さんだそ

うだ」

「ご苦労なこった。か弱い女の身で、戦場で倒れなければいいが」

ナイチンゲールの名は、イギリス国内で知られていて多くの義援金が寄せられ、政府も薬や衣服など多く用意し、フロレンスは女性の心遣いで日用品など、いろいろ買い調べ、10月21日ロンドンを出発、11月14日トルコのスクタリに到着。

野戦病院の状態

「なんてひどい、まさかこんなとは」

野戦病院は小高い丘の上にあり、にわか造りの建物に入つたフロレンス達はア然とした。

怪我や、病気の兵士があふれ、ベッドが足りなくて廊下や床に転がされ、血やうみ、汚れ物、汚物にもまみれひどい臭い。

「女になにが、出来るもんか」

イギリス陸軍には女性の仕事が無く、フロレンスが陸軍病院で看護婦の監督の役を引き受けたのが、初めてだったのです。

「包帯はありませんか」

「無いよ」

「ガーゼは」

「無い」

「シーツの替えは」

「見ての通りあるわけないだろう」

無い無い尽くして何にも無い。

「まず清潔にしなければ、まず洗濯です」

と、先頭に立つて働き、汚れ物の洗濯、病室の掃除、簡単なマットを作つてベッドを増やし、病人を休ませる。

「コラツ、病人を勝手に動かしちゃいかん」

医者、診察し薬を与えるだけで、後は放つたらかし。

フロレンスは、町の人たちにお金を出して掃除、洗濯、大工仕事など手伝わってもらう。

包帯や薬も沢山持つてきたつもりだったが、大勢の病人でとても足りない。その上傷ついた兵士がどんどん送られてくる。

「ベッドも毛布も着替えも、包帯もガーゼも足りません。大臣にお願いしたらど

うでしょう」

しかし軍医長は、

「その必要はない」

と、知らん顔。

そこで自らペンを取り、大臣に病院の様子を詳しく報せ、新聞社にも実情を訴え、必要な物を送ってくれるよう頼みました。

戦争だからといい加減な手当てをしていた医者たちは、フロレンス達がきびきびと仕事をして、病人たちから感謝されているのが面白くなく、なにかと嫌がらせをする。

「患者さんに薬をあげたいのですが」

「薬のことは医者の役目だ」

と、出し渋る。

「病人が寒さに震えています。毛布やストーブ、石炭をお願いします」

「上官の許しが出ていない」

「婦長さん、今日も裏門から亡くなつた人が大勢運び出されています」

この苦しい状況を乗り越え、ランプの天使と呼ばれる活躍は、次号連続に申し上げます。